

# ペア学習による家庭科教育実践に関する研究

## A Study of Home Economics Classes Using Paired Learning

高橋 容史子\*    山下 綾子\*\*    河村 美穂\*\*\*  
Yoshiko TAKAHASHI,    Ayako YAMASHITA,    Miho KAWAMURA

### 1. 研究目的

家庭科の授業は、調理実習や被服実習を思い出として語られることが多い。これらの実習はほとんどがグループで取り組まれ、仲間とともに学ぶ学習形態が家庭科の授業の特徴の一つでもある。これまで、このようなグループでの学びの効果や、実態についての研究は数多く行われてきた。なかでも、共同で作業をすることの多い調理実習では班員同士の話し合いの中で、調理の知識や技能についての学びが行われている<sup>i</sup>ことや、班の構成によって学びの質が変わる<sup>ii</sup>ことなどの知見が示されている。

ところで、本学附属小学校の家庭科では、調理実習に限らず、様々な学習場面においてグループ学習に加えてペア学習を実践してきている。ペア学習は、たとえば、被服実習におけるミシンの使用や、調理実習における包丁・まな板の使用のように、道具を共用する必要性から取り組んできた面もあるが、調査活動や体験活動を伴う学習において、場面に応じてペアをつくり、2人で学び教えあうこと・評価しあうことに効果があることを実感し、この効果を意図して行うようになった。さらに、その成果と課題について実践場面での検証をくわえながら、試行錯誤して取り組んできた。実際には、すべての学習においてペア学習が有効なのではなく、十分にその効果を図るために適切な場面の選択や方法論の精査が必要とされることを痛感している。

しかし、これまで家庭科の教育実践ではペア学習が行われることは多く見られてきたにもかかわらず、家庭科教育研究においては、その方法や実態についてほとんど研究対象とされてきていないのが実情である。

そこで、本論では、本附属小学校家庭科で長年蓄積してきたペア学習の事例を振り返り、そのねらいと実際の授業での方法を明らかにした上で、今年（平成21年）度の2つの事例を対象として家庭科教育実践におけるペア学習の可能性を検討することを目的とする。教育実践研究は、実践場面で手ごたえのある授業を分析的に評価・検討し、そこから教育実践に関する理論を生成することが一つの使命であると考え。本論は、この考えに基づいて家庭科教育におけるペア学習に関する理論を生成することを最終目標としながらも、まず、実践事例を分析的に整理することからはじめたいと考える。

---

\* 埼玉大学教育学部附属小学校  
\*\* 埼玉大学教育学部附属小学校  
\*\*\* 埼玉大学教育学部家政教育講座

## 2. これまでのペア学習の取り組みについて

本校家庭科部では、これまでいくつかの題材においてペアでの学習活動を取り入れてきた。1 学級の児童数が40名でありながら、ガスこんろやミシンなどの活動場所や道具の数に限りがあるという物理的な要因から、ペアで場所や道具を共有しながら学習を進めざるをえないという実情があった。しかし、ペアでの活動を繰り返すうちに、個人やグループで活動するよりも効果的に学習を進めることができているのではないかと考えるようになった。家庭科学習の導入期である小学校段階では、相手の様子を観察して自分の活動に生かしたり、分からないところを教え合ったりする姿が多く見られる。一人ひとりの技能や知識が試される実習の場面でも、ペアがいることで安心して取り組むことができるという感想が多くあった。そこで、一人ひとりの活動時間を十分確保しながら、安心して活動できるようにするため、学習内容に不慣れな時期にペアでの学習活動を積極的に取り入れるようにした。そのねらいは、次の2点ある。

- ①ペアで活動することにより、互いのわからない所を教え合い、共同的な学びとする。
- ②ペアで活動することにより、互いの活動を見合い、評価し合う。

以下に、筆者らが関わっている近年のペア学習をとりいれた実践を示す(表1)。

表1 ペア学習を取り入れた実践事例(附属小学校家庭科平成17~21年)

実施年度	題材名	ペアで行った主な学習活動	ねらい
H17	「おいしいためものを作ろう」(5年)	・ペアで野菜をいためた様子を比較し、野菜のために適切な切り方や火力、調理時間について話し合う。	①
H18	「生活に役立つ物を作ろう わくわくソーイング2」(6年)	・裁断前、ミシン縫い前など、製作途中にペアで確認しながら進める。・中間発表会では、ペアの進行状況や作品の工夫点について紹介する。	①
H20	「チャレンジ! エコで快適な住まい方~そうじ編~」(6年)	・ペアで、考えた清掃方法や調べた情報を共有し、汚れや場所に合わせた清掃計画を立てて、清掃する。 ・ペアで清掃の成果を振り返り、自分たちの清掃について評価する。	① ②
	「生活に役立つ物を作ろう わくわくソーイング2」(6年)	・ペアで教え合ったり、確認し合ったりしながらミシンの使い方を学ぶ。	①
H21	「おいしいためものを作ろう」(5年)	・ペアで交互に切る、いためる調理を行う。試食もペアで行い、調理の様子と合わせて相互評価を行う。	① ②
	「日本の味 ごはんとみそしる」(5年)	・ペアで交互に切る、だしをとる、みそをとくなどの調理を行う。試食もペアで行い、調理の様子と合わせて相互評価を行う。	① ②
	「生活に役立つものを作ろう 楽しいソーイング」(6年)	・ペアで教え合ったり、確認し合ったりしながらミシンの使い方を学んでいく。	① ②

表1の右欄には、それぞれの実践でのペア学習でねらいとしたことを、前述の①または②で示した。この表からわかるように第5学年、第6学年ともに、ペアでの活動を取り入れている。第5学年では、互いに見合ったり、教え合ったりすることを中心とし、第6学年では、互いに評価し合う活動を重視している。さらに、2学年間の学習を通して、個人、ペア、グループの活動を

バランスよく配置するようにしている。題材によっては、一つの題材の中でペアの活動から個人やグループの活動へと移行させていくものもある。どの題材においても一人ひとりが確実に知識・技能を身に付けることを前提とし、前述のねらい①、②により、効果的に身に付けられるようにしている。ペアは、題材ごとに組み直し、学級内での人間関係を広め、多様な考えに触れられるようにしている。同性どうしでも、異性とのペアでもねらいは達成されるが、これまでの実践から、同性でペアを組み、異性のペアと班を構成して活動するようにしている。同性ペアのほうが、互いに質問しやすく、安心して活動を進めることができる場面が多いと考えるからである。

### 3. ペア学習の効果と課題

ここでは、本年（平成21年）度実施した二つの事例をもとに、ペア学習の方法や効果について考察を加えてみたい。

#### 事例1「6年 生活に役立つものを作ろう 楽しいソーイング」

##### 1 これまでの実践より

本校家庭科の年間指導計画では、5年で手縫い、6年で手縫いとミシン縫いとを併せて布を用いた作品を製作することとしている。平成20年度より、ミシンの使い方の学習（針のつけ方、上糸・下糸のかけ方など、直線縫いができるようになるまで）をペアで行っている。昨年（平成20年）度の学習後の児童の感想では、「ペアで分からないことを相談したり、助け合ったり、手順が違うなどの指導もし合って、ミシンを楽しく覚えることができる。」、「ペアの後に自分がやる時は、ペアのやり方を参考にして行うことができる。」、「準備の仕方で迷った時や縫っていて糸がからまった時には、一人より心強い。」というように、ペアでの活動により、学習活動を進める上での心強さと、自分の技能の高まりを実感しているものが多かった。

このような児童の声を参考に今年（平成21年）度の実践では、初めてミシンに触れる1時間目から、直線縫いで共通作品を作り上げる6時間目までをペアで行い、その後一人ひとりが作りたいものを選んで製作する時間は、同じ物を製作するものどうしでグループを組んで活動を進めることとした。

##### 2 実践のねらい

- ・ペアで活動することにより、初めてミシンを扱う児童も安心して活動ができるようにする。
- ・ペアの活動を観察し合うことで、ミシンを使った直線縫いを行うための知識・技能を確実に身に付けることができるようにする。

##### 3 実践の内容

###### (1) 題材の指導計画（12時間扱い）


○ミニポーチを作ろう	1時間	} <ペアでの活動> 互いに教え合い、技能を確実に身に付けられるようにする。
○ミシンの使い方を知ろう	3時間	
○オリジナルポーチを作ろう	2時間	
○オリジナル〇〇の製作計画を立てよう	2時間	} <グループでの活動> 同じ課題の者どうしで、考えを出し合ったり、分からないところを教え合ったりできるようにする。
○オリジナル〇〇を作ろう	3時間	
○オリジナル〇〇の発表会をしよう	1時間	

###### (2) ペアの形態

・男女1名ずつのペア・学級内で席が隣の者どうし・ミシンの扱いの経験は、考慮しない。

(3) ペアで行った授業の実際

表2 授業概要 (全12時間のうちペア学習を取り入れた6時間分の概要)

時	学習活動	指導の実際
1	①ミニポーチを作ろう ・あらかじめ直線縫いができる状態に準備してあるミシンを使って、直線縫いを行い、ミニポーチを作る。	・20組のペアで行えるよう、20台のミシンを直線縫いできるよう準備しておく。 ・ミニポーチを作る手順とミシン使用上の注意を確認し、ペアで見合いながら、活動を進めるよう指示する。
<p>ミシンに初めて触れる1時間目は、二人ともが初めてというペアも多く、ペアで1台ずつのミシンがあっても、経験のある児童のところに聞きに行ったり、早く終わった児童がまだ終わらないペアの様子を見に来て手伝ったりする姿が多く見られた。</p>		
2	②ミシンの使い方を知ろう ・ミシンの使い方ガイドブックを見ながら、ペアで直線縫いができる状態まで、ミシンの準備を行う。	・ミシンの使い方ガイドブックをペアに1冊ずつ配り、順番に進めていくよう指示する。 ・ペアでの活動の様子を観察しながら、間違えている部分について指導するとともに、間違えやすい部分については3時間目の始めに全体でも確認する。
3	③コースターをつくろう ・直線縫いの準備ができたペアから、10cm四方のコースターを製作する。	・コースターの作り方の手順を説明し、ミシンの準備ができたペアから製作するよう指示する。
<p>ペアで1台のミシンに向かい、ミシンの準備を進める児童とガイドブックを見ながら確認する児童というように分担しながら進める児童がほとんどであった。順調に準備が進み、コースター作りまで行えたペアは、会話も多く、協力的であった。一方で、一人がなかなか準備が進まず、ペアもどこが違っているのかを指摘できない場合には、会話が少なく学習活動に満足感を得られないこともあった。</p>		
		
5	④オリジナルポーチを作ろう ・自分の作りたいポーチの大きさを考えて、布を裁つ。 ・布端を三つ折りし、ミシンで縫う。 ・ミシン運転免許試験として、オリジナルポーチを作り、ペアがミシンの準備の様子を評価する。	・自分の使う場所や入れる物を明確にし、ポーチの大きさを決めるよう助言する。(縫い代の必要性について確認する。) ・三つ折りの役割とその仕方について説明し全体で行う ・ミシン運転免許試験として、一人20分の持ち時間でオリジナルポーチの直線縫い部分3カ所を縫う。(三つ折り部分1カ所、両脇2カ所)
<p>ミシン運転免許試験では、制限時間内に縫い終えることができた児童は、全体の3分の2程度であった。ミシンの扱いに慣れている児童が先に縫い始めることが多かったが、一人目の方が比較的時間がかった。</p>		

(4) 授業後のアンケートによる児童の実態

授業終了後、それぞれの活動時の満足度を5段階（5：とても満足、4：満足、3：どちらとも言えない、2：不満、1：とても不満）で評価してもらった。筆者の担当している2学級（男子39名、女子40名、計79名分）のデータを以下に示す。

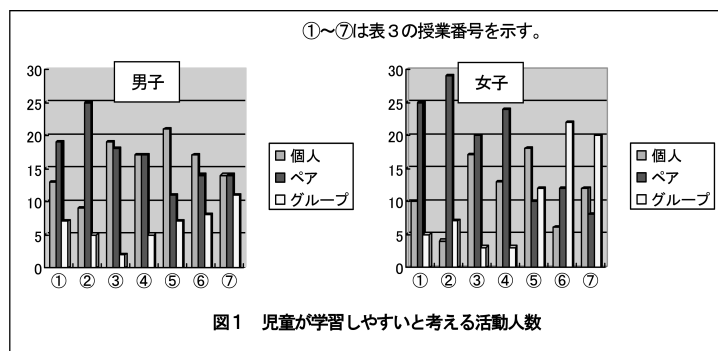
表3 事例1の授業①～⑧（全12時間）における児童の満足度（5点満点）

	①ミニ ポーチ 製作時 (1時)	②ミシンの 使い方 習時 (2・3時)	③コ ースタ ー製 作時 (4時)	④オ リジ ナル ポ ーチ 製 作 時 (5時)	⑤製 作計 画を 立て る 時 (6・7時)	⑥試 し 作 り 時 (8時)	⑦オ リジ ナル 作 品 製 作 時 (9・10・11時)	⑧オ リジ ナル 作 品 完 成 時 (12時)
男子平均	4.26	4.15	4.03	4.49	4.08	4.08	4.51	4.79
女子平均	4.59	3.97	4.08	4.59	4.41	4.28	4.69	4.85
合計平均	4.37	4.01	4.00	4.48	4.19	4.13	4.54	4.76

男女ともに、ミシンを使って製作する時間と作品が完成した時間（網掛け部分）に満足度が高くなっていることが分かる。なかでも⑦、⑧で満足度が高いことは、それまでの時間でミシンを扱う際の基本的な知識・技能が確実に身に付いており、スムーズに活動できていることを表している。

一方、学習時の活動を振り返り、それぞれの活動時に学習しやすいと考える人数についても質問した。この質問については、男女で回答に違いが見られた。

男子は、ミシンの使い方を習得した後、⑤～⑦のオリジナル作品製作時には、個人または、ペアで活動したいと考える児童が多いのに対して、女子はグループで活動したいと考える児童が非常に多いということが分かった。活動時の様子を振り返っても、女子の方がグループで相談したり、確認したりする姿が多く見られた。男子は、グループで同じテーブルを囲んでいても、相談相手は限定され、個人で考えて進めることが多かった。自分の活動時間を多く確保するため、ミシンを一人一台使いたいという考えから個人での活動を希望する男子と、分からない時に相談しながら進められるように同じ作品を作る児童とグループでの活動を希望する女子の実態が見えてきた。



4 考察

学習内容（ミシンを使った製作実習）に不慣れな時には、ペアでの学習形態が有効であること

を児童も実感していることが分かった。一方で、学習を進める上で必要な知識・技能が身に付いてくると、個人で活動したいという割合が高くなる。このことから、児童の主體的な活動を引き出すためには、やはり基本的な知識・技能の習得が不可欠であることが分かる。

また、学習全体を通して個人で活動したいと考える児童は、ミシンの扱いに慣れ、技能の高い児童が多かったが、技能の低い児童にも個人で活動したいと考える児童が数名いた。理由を尋ねると「自分がうまくいかなかった時に、相手の活動時間が短くなり、迷惑をかけてしまうから個人で活動した方がよい。」というものであった。ペアやグループで活動すると分からないところを教え合えるのでよいという感想がほとんどだが、このようにペアの相手に対する遠慮があるという実態にも目を向け、さらにペアの組み方やペアのかかわり方について検討する必要があると考える。

今後は、2学年間の学習を通して、題材によってペア学習を取り入れるのか選択し、取り入れる場合には、どの段階が適しているのかを考慮したい。さらに、ペア学習でのねらいを題材ごとに段階的に明確にして取り組んでいきたい。その中で児童の学びがどのように変わっていくのかを明らかにしていきたいと考える。

## 事例2 第5学年 日本の味 ごはんとみそしる

### 1 これまでの実践より

本校家庭科部では、調理実習の際にも、ほとんどの場合ペアを組んで学習を進めてきた。調理技能を確認し合うことで、漠然とできるのではなく、何ができさらに何の練習が必要なのかを、児童自身が見つけていく力をはぐくむことを目指してきた。そのために、ペアで互いを観察し相互評価を学習の振り返りに生かしてきた。

本実践では、これまでの実践を生かし、ペアで繰り返し相互評価を行うことで、自己評価力を高め、基礎的・基本的な知識と技能の確実な定着を目指すことを試みた。

### 2 実践のねらい

調理実習において、調理技能をペアで繰り返し相互評価することにより基礎的・基本的な知識と技能の確実な定着を図る。

### 3 指導の実際

(1) 題材の指導計画 (13時間扱い ※米飯についての10~13時間目については省略)

○ペア学習によるみそ汁の試し調理の実習	2時間
○みそ汁作りの評価指標作成①	1時間
○ペア学習によるみそ汁の調理実習・みそ汁作りの評価指標作成②	2時間
○削り節だしについての学習	1時間
○我が家のみそ汁調べ	家庭
○オリジナルみそ汁の計画作成	1時間
○ペア学習によるオリジナルみそ汁の調理実習	2時間

(2) ペアの形態

・男女1名ずつのペア ・調理技能や経験等の考慮はしていない。

(3) ペア学習による調理実習の実際(4・5/13時)

表4 オリジナルみそ汁の調理実習

学習活動	時間	教師の働きかけ (○)	資料等
1 前時の学習を振り返る。 2 本時のめあてを確認する。	5	○おいしいみそ汁を作るために、要点を考え評価指標を作ったことを確認する。 <b>にぼしだしでおいしいみそ汁を作ろう</b>	・前時のワークシート
3 ペアごとにみそ汁の調理実習をする。 ・ペアの中で実習者と観察者に分かれ、一人が調理をしている時、もう一人はその様子(手順・話したことなどを観察用紙に記入する)。	53	○ペアごとに材料を渡すが、材料を分けて調理は一人調理で行なうことを確認する。 ○実習者が安全に調理器具を使うことができているか、指導・助言する。 ○観察者がメモをとれているかを確認し、記録のポイントを示していく。	・調理器具 ・観察用のワークシート
4 煮干しだしのとり方・みその扱い方の要点について話し合う。	30	○話し合いをもとに、評価指標を設定し、クラスで共有できるようにする。	
5 本時のまとめをし、次時の予告をする。	2	○だしには、他にも種類があることを知らせ、次時はだしについて学ぶことを予告する。	

4 実践結果と考察

ペア学習の実践の結果をまとめると以下の3点になる。

① 調理の技能面に関して

調理実習の観察は、前時に作成した観察のポイント(評価指標)を用いて手順や話したことをメモしながら行った。本時で使用したワークシートを図2に示す。題材終了後の児童の感想から、「教え合うことで、自分が上達した。」「2人で同時に成長できた。」というものがあつた。これは、同じ評価指標で互いを観察することで、観察者が実習者から学ぶことができたためと考えられる。そのためにも、評価指標が児童に共通に理解されていなければならず、評価指標を児童とともに作成することに重要な意義があるといえる。

図2 相互評価のワークシート

日本の味 ごはんのみそ汁④ **みそ汁作りレベルアップを目指そう!! マスターコース**

11月11日(土) 5年3組 名前 \_\_\_\_\_ ペアの名前 \_\_\_\_\_

これができたら、すごいね!!		できてほしいな!
だしのとりかた (にぼし)		にぼしの頭とほらわたをとり、小さくだいて水に入れる。 メモ 細かく切れている。 <input type="checkbox"/> ペアから <input checked="" type="checkbox"/> 自分で
実の切り方	材料を形や大きさをそろえて切ることができる。 メモ 油あげはふくらむことを考えていた。 <input type="checkbox"/> ペアから <input checked="" type="checkbox"/> 自分で	ねぎは小口切り、油あげは短冊切りにする。 メモ ねぎはきれいに油あげは切れている。 <input type="checkbox"/> ペアから <input checked="" type="checkbox"/> 自分で
実の入れ方	火の通り具合を確認しながら、入れることができる。 メモ できている。 <input type="checkbox"/> ペアから <input checked="" type="checkbox"/> 自分で	にえにくい材料から入れる。 メモ ねぎは油あげ <input type="checkbox"/> ペアから <input checked="" type="checkbox"/> 自分で
みその入れ方		少量のだしじるといって、みそを入れる。ふつうしたら、すぐに火を消す。 メモ 湯の火を消して待たせていた。 <input type="checkbox"/> ペアから <input checked="" type="checkbox"/> 自分で

自分のみそ汁にどのくらい満足かな? ●おいしさ ★★★★★  
そのわけは? 前よりも美味しくできたけれど、まだ足りない所があるからかな。

●調理のうでまえ ★★★★★  
そのわけは? にぼしを入れてから5分間までなが、たので火を付けたいが、他はできたので、良かった。

ペア学習において、児童が教え合った内容(複数回答)を示したものが表5である。最も多かったのは、包丁での実の切り方であった。これは、見た目でもわかりやすく、ペアで互いに声をかけることができたのではないかと考える。また、その他の内容については、ワークシートに記入されているものが多く挙がっている。このことから、児童に観察の視点をあらかじめ示しておくことが、ペアでの学習をより深めることにつながると考える。

以上のように、ペアで互いに見合うことは、児童が自分を客観的に見つめたりペアから学んだり、基礎的・基本的な知識と技能の定着に結びつくと言える。

## ② 生活文化の交流について

第1・2時において、初めてのみそ汁をペアで協力して作ったあとの児童の感想を以下に示す。

11年間も生きてきたのに、作り方があまり分からず、みそを最初に入れてしまいました。自分はあると思ったのに、ペアの子から「それはちがうよ。」と言われたことがしょうげきを受けました。特に心に残っています。

作り方を見ないで作り、にぼしをそのまま入れてしまったり、失敗もしたけれど、もともと知っていたことを生かして、みそ汁を作ることができた。その時知らないことを、ペアの人が知っていて、新しいことがわかった。

ここには、「新しいこと」を知り、「しょうげきを受けた」ことが示されている。

また、第7・8時のオリジナルみそ汁作りでは、それぞれの家庭のこだわりが見られ、「ペアの家のみそ汁がわかった。」「ペアの家のお母さんがやっていることがわかった。」といった自分の家とは違うことを知ったという感想が児童から聞かれた。このように、ペアの間で知識や技能の交流だけでなく、それぞれがもつ家庭の生活文化も交流されていることがわかった。これにより、児童は我が家のことしか知らなかった自分に気付き、生活の多様さへの関心をより高めることができる。特に親密に話しながらすすめるペア学習においては児童が互いの生活文化を交流し合うことによって、学習への関心をより高めるために有効であると言える。

## ③ 情意面での交流について

ペア学習を終えた児童の感想に「楽しかったことを、教え合うことができた。」「ペアのみそ汁も食べられてうれしかった。」というものがあつた。本校では、調理技能の確実な定着を目指し、調理実習では一人調理を行っているために、それぞれの児童が個別の活動に集中するあまり一人きりの学習になる場面も見られた。しかし、ペア学習で互いを見合うことで、確実に自分の学習を見てくれている人がいる安心感と、学習を共有できる喜びを児童が味わうことができることが

表5 ペア調理で教え合ったことの内容

教えたり、教えられたりしたこと	人数
実の切り方(工夫の仕方を含む)	21
だしのとり方(手順、こし方など)	8
調理のタイミング(実を入れる、にぼし・かつお節を入れる)	6
包丁の持ち方・使い方	5
みそをだし汁でとくこと	3
味見をしてもらったこと	2
みそは最後に入れること	1
実は先に切っておくこと	1
火の通り具合	1
鍋を持つこと	1



分かった。これは、できたことを認めてもらう満足感につながり、児童自身が成長を自覚し、自信へとつながっていくものと考えられる。

#### 5 今後の課題

結果と考察をふまえて、以下の3点が今後の課題として考えられる。

##### ①観察の視点の明確化

評価指標が文章によるものだけであったため、確実に統一が図れなかった。そのため、実の切り方を写真で提示しそれと見比べるなど、視覚化していくとよいと考える。

##### ②観察内容の共有化

ペアで互いを評価した理由について、話し合う時間を充実させると、より理解が深まると考える。

##### ③ワークシートのさらなる改善

ペアで観察内容を話し合えるように、ワークシートを工夫していく必要がある。

今後は、ペア学習がより有効的に機能するように、題材や場面の設定なども考慮し、研究を進めていきたいと考える。

#### 4. 家庭科にペア学習を効果的に取り入れるために

以上のように、実践事例におけるペア学習について検討した結果、ペア学習という方法は、場面と題材を選び、目的を明確にして取り入れることが大切であることがわかった。

##### (1) ペア学習の成果

家庭科における調理実習や被服実習のような体験的な学習は、本来一人で取り組む個別の学びを確保すべきである。事例1でオリジナル作品の製作において多くの男子が個別の学びを望んでいるという実態は、そのことをよく表している。

しかし、これまでの実践においては、器具や設備の実態から児童にとって効果的であるという理由からペア学習を取り入れた場面も少なからずあった。これは、1クラス40人を担当教師1名で実習授業を行うという現状の制約のなかで選択した方法であったとも言える。一方で、ペアで学ぶことを積極的に取り入れた実践も行ってきた。これらの実践から、ペア学習を取り入れる効果は、次の3点に整理できる。

- ① 学びあうということ（互いに見て学ぶ・相互に評価して確実な知識と技能を習得する）
- ② 精神的な安心感のある学び（初めての特に技能を使う場面に2人で取り組むという安心）
- ③ 人間関係能力を学ぶこと（ペアとの関係、さらにグループとの関係を学びながら学習する）

なかでも、②に見られるような親密な関係性は、グループ学習には見られないペア学習固有の特徴と考えられる。グループ学習では、グループ内で主流となる意見に対して、それとは違う意見が埋没してしまうことがよく見られる。とくにグループという人間関係のなかで自分の意見を表明しない児童の存在が問題であることが多い。しかし、ペア学習の場合には、1対1の関係で、お互いが意見を言い合い、話し合う場面が必然とされるため、個々の意見が尊重されて確保される。このことは、個々の生活文化が披瀝され、児童にとっての新たな気づきを生むという状況も作りやすい。

また、初めてミシンを使う、初めて包丁を使うなど児童にとって勇気のいる活動に際しては、ペアの相手の見守りが「安心」という状況をつくると考えられる。さらに、相互の評価や注意を

互いに喚起するという活動もあって、知識や技能の定着に効果があったのだと考えられる。ただし、児童の感想にもあったように、ペアの相手への遠慮も生じる場合があるということを念頭に、ペアの組み方など十分に配慮する必要がある。

今回分析した二つの事例は、いずれも技能の習得を目標としたものであった。技能を習得するはじめの段階でペア学習を取り入れるようにしたこと、ペアによる相互評価を重視したことは、一定の成果があったと言えるだろう。これらの実践は、ペア学習という形態をとりながらも、最終的には、各自が自立して学ぶことの大切さを重視した実践となっていることを再確認したい。

## (2) 今後の課題

今後の課題としては、ペアの組み方についての詳細な検討を行うことがある。他教科の技能の習得に関する学習場面においては、技能の差がある児童同士を組ませるといことも見られるが、本校においては、小学校5年生段階で、調理や被服に関する技能の差があまり見られないということから、ほとんど考慮してこなかった。ただし、学校によっては、生活経験の違いから生活技能の差が見られる場合もあり、技能の習得を目指す場合には、家庭科におけるペアの組み方を考えていくことも必要であろう。

また、男女のペアとするのか、同性のペアとするのかに関しては、意見の分かれるところである。ものごとのとらえ方や視点の違いを明らかにする場合には、男女のペアで話し合うことも重要である。ただし、これまでの経験から、技能の習得に関しては、身体的な接触の面からもとくに6年生においては、男女のペアではスムーズに学習がすすまないことが多く見られた。また、男女のペアで行った場合には「女の子はできないと恥ずかしい」とする女子がいるという事実からも、男女が共に学ぶということの意味を考え直すことを、ペア学習に関連して検討する必要があると考える。

最後に、事例2においては、ペアで相互評価することの可能性と課題を明らかにすることができた。とくに技能を習得する場面で相手のことを観察して評価することによって、自分自身の技能についても自己評価することが促された。この成果をもとに、今後は、相互評価・自己評価の方法の検討に際してペア学習を効果的に取り入れることを考えていきたい。

## <参考文献>

- i 石井克枝、武田紀久子、小西史子、河村美穂、武藤八恵子、川嶋かほる「調理実習における共同的な学び」日本家庭科教育学会誌、46（2）pp136-145, 2003
- ii 舟木美保子、笹川恵美子「児童の調理実習中の活動と実態（第1報）調理実習中の学習経験と情報収集の仕方」日本家庭科教育学会誌、33（1）、pp59-63, 1990